

# 他者の心的状態の理解および利用スキルの適用メカニズムの解明 (中間報告)

中 部 大 学 佐 藤 友 美

## Mechanism of using others' mental states and its application of the other-oriented skills

Chubu University, SATO, Tomomi

### 要 約

他者の心的状態を理解しそれを適応的に利用することは、他者との良好な関係を維持する上で重要な能力である。しかし、先行研究では理解した他者の心的状態に応じることは難しいことが示されてきた。本研究では他者の心的状態への興味が高まることで、他者の心的状態を利用するスキルを日常生活に適用できるようになるという仮説を検討した。実験1では他者の心的状態を利用するスキルの発達を、実験2では他者の心的状態への興味の発達を他者の心的状態を知ろうとする行動から明らかにした。その結果、子どもは3歳から他者の心的状態に応じるスキルを持っているが、他者の心的状態を知ろうとするのは8歳ころからであることが示された。先行研究において、8歳ころになると自発的に他者の心的状態を利用できるようになることが示されてきた(Clark & Delia, 1976)ことから、他者の心的状態への興味が高まると、他者の心的状態に応じるスキルを適用できるようになることが示唆された。

**【キー・ワード】** 心的状態の利用, 心的状態への興味, 幼児, 児童

### Abstract

Understanding others' mental states and orienting the mental states are important skills to maintain good social relationships. However, previous studies have shown that the other-oriented behaviors are difficult for young children. The present study investigates the hypothesis that children could orient others' mental states when children find interest in others' mental states. Experiment 1 showed that children at age of three have already acquired the other-orientation skill. Experiment 2 revealed that children could orient the other's mental state when the mental state is unavailable from 8-year-olds. This result suggested that children's interest in others' mental state develop from 8-year-olds. Given that children could orient other's mental state spontaneously from 8-year-olds (Clark & Delia, 1976), children start to develop their other-oriented behavior based on their interest in others' mental states.

**【Key words】** other-oriented behavior, others' mental states interest, preschoolers, school-age children

## 問題と目的

人は幼いころから、自分の行いたいことや考えていることが他者とくい違う状況、即ち対人葛藤を経験する (Rubin & Rose-Krasnor, 1992)。そのような対人葛藤は、自己の欲求を達成しながらも他者との良好な関係が維持される形で解決されることが望ましい (Chandler, 1985)。この解決方法の一つに説得がある (Rubin & Rose-Krasnor, 1992)。説得とは、自己の欲求を達成するために他者の態度変化を引き起こす、言語的方略である (Erwin, 2001; Perloff, 1993)。説得により他者の態度を変化させるためには、他者が反対している理由を反駁するなど、他者の心的状態に着目する必要がある (Bartsch & London, 2000)。そのため、他者の心的状態に応じた説得のスキルは、対人葛藤の解消といった社会的発達において大きな重要性を持つといえる。

これまでの研究から、他者の心的状態に応じた説得は幼児期初期から可能であることが知られている。例えば Bartsch, London, & Campbell (2007) は、主人公は小鳥を飼いたいものの、母親は小鳥は“うるさい”と、父親は“汚い”と思っており、ともに小鳥を飼うことに反対している状況を設定した。そして、母親と父親のそれぞれを説得するためには、小鳥は“静か”と“きれい”のどちらを言うべきかを子どもに回答させた。その結果、5～6歳児になると母親に対しては“静か”を選び、父親に対しては“きれい”を選ぶことができた。これは、他者の心的状態に応じて説得するスキルが幼児期初期にはすでに獲得されていることを示唆する。

一方で、他者の心的状態に応じた説得は8歳頃まで難しいという知見も存在する。例えば Clark & Delia (1976) は、7歳から14歳の子どものを対象に、“犬を飼ってほしい”と親に頼む状況で相手をどのように説得するかを自由回答で求めた。その結果、7歳児は“犬はかわいいから飼いたい”など、自分の欲求を相手に主張するだけの説得が多かった。一方で8歳以降では、“犬の世話は自分でするから飼いたい”など、自分の欲求を述べるだけでなく相手の反対理由 (e.g., “犬の世話は大変”) を予測した説得を行うようになった。この結果は、8歳頃までは必ずしも他者の心的状態に応じた説得ができるわけではないことを意味する。つまり先の Bartsch らの研究で示された“他者の心的状態に応じて説得するスキルは幼児期初期に獲得されている”という知見を踏まえると、8歳頃までは必ずしもそのスキルをどのような状況や場面でも使用できるわけではないことを示唆する。

それでは、他者の心的状態に応じて説得するスキルを利用するためには、何が必要なのだろうか。他者の心的状態を利用する能力が備わったとしても、子どもが対人場面においてそれらを適用しようとしなければ、実際に対人場面において他者の心的状態を理解し利用することには至らないと考えられる。そこで本研究では、相手の心的状態に対する興味に着目する。他者の心的状態に対する興味とは、「なぜそう言うのか」「なぜそうするのか」のように、他者の言動の背後にある心的状態に注意を向けることである。子どもは5歳で心の理論を獲得し、他者の心的状態に関するある程度の知識構造を得る。その上で他者の行動を見ることで、自分の予測と実際の事象のずれを認識でき、「なぜそう

言うのか・するのか」といった興味を持つことができると考えられる。実際、上淵 (2005) は、乳児は新規なものが目に入ってきたために喜ぶが、発達につれて「目標」や「基準点」への達成やそこからのずれに喜ぶようになるとしており、興味は予測と実際とのずれの認識から生まれるといえるだろう。このような他者の心的状態への興味を持てるようになることで、快感情を伴って他者の心的状態に注意を向けられるようになる。これが、心的状態利用能力の適用につながるのではないだろうか。

そこで本研究では仮説を検証するために、他者の心的状態への興味の発達様相を明らかにする。そこで心的状態の理解および利用が求められる説得に着目し、説得場面において他者の心的状態への興味をいつ頃から示すようになるのかを明らかにする。上述のとおり、他者の心的状態の理解や利用の能力は5歳ころから発達することが明らかにされていることから、他者の心的状態への興味はその能力が獲得された後に獲得されるのではないかと考えられる。

## 実験 1

実験 1 では、他者と自己のそれぞれの心的状態が明示された状況で、他者の心的状態に応じた説得が何歳頃から可能なかを検証する。主人公が小鳥を飼うことを説得する場面であれば、主人公は“小鳥はきれい”と思っており、説得相手は“小鳥はうるさい”と思っており飼育に反対している。もし実験参加児が他者の心的状態に応じて説得できるのであれば、説得相手が反対している理由となっている信念を覆す“静かな小鳥”という情報を呈示すると考えられる (Bartsch et al., 2007)。一方、子どもが他者の心的状態に応じて説得できないのであれば、主人公の心的状態である“小鳥はきれい”という情報を呈示すると考えられる。以上の予測を検証することにより、実験 1 では他者の心的状態が明示された状況下ではいつ頃から他者の心的状態に応じた説得が可能になるのかを明らかにする。

## 方法

**参加者** 保育園および幼稚園に通う、3歳児9名(女児5名,  $M = 3;9$ ,  $range = 3;8 - 3;11$ ), 4歳児16名(男児8名,  $M = 4;6$ ,  $range = 4;1 - 4;11$ ), 5歳児22名(男児11名,  $M = 5;5$ ,  $range = 5;0 - 5;11$ ), 6歳児12名(男児6名,  $M = 6;3$ ,  $range = 6;0 - 6;7$ )を対象とした。

**材料** 主人公である子どもが“小鳥を飼いたい”と母を説得するような5つのストーリーを用いた。各ストーリーは次の5つの場面から構成されていた。第1に、主人公の男児(女児)が希望すること(“小鳥を飼いたい”)を呈示し、次に主人公が希望する理由を述べる(“小鳥はきれい”)。次に、説得相手である母にお願いをし(“小鳥はかわいいから小鳥を飼いたい”), 説得相手がそれに反対する。そして最後に、説得相手は反対理由を述べる(“小鳥はうるさい”)ものであった。子どもの回答の選択肢として、主人公の心的状態を表したカード(“きれいな小鳥”)と相手の反対理由を覆すカード(“静かな小鳥”)を描いた絵カード2枚(5つの場面があるため計10枚)を用意した。

**手続き** 10~15分の1対1の面接実験を行った。ペープサートを用いてストーリーを提示した後、“主人公は対象物(e.g., 小鳥)に対してどのように思っており、それに対して母はどう発言した

のか”を聞く質問（理解質問）を行った。本質問に正答できなかった子どもに対しては、もう一度ストーリーを説明し、再び理解質問を行った。その後、主人公の心的状態を表したカード（e.g., きれいな小鳥）と相手の反対理由を覆すカード（e.g., 静かな小鳥）を提示したうえで、“どちらの対象物であれば母は賛成するか”という質問（説得質問）を行い、該当するカードを選択させた。相手の反対理由を覆すカードを選択できれば、説得得点として1点（5点満点）を与えた。

## 結果と考察

一要因分散分析を行ったところ、年齢の主効果は見られなかった ( $F(3,58) = 0.56, p = .664, \eta^2 = 0.03$ )。また、各年齢における得点のチャンスレベル検定を行った結果、いずれの年齢群においてもチャンスレベル（i.e., 2.5点）以上に他者の反対理由を覆す選択肢を選択していた（年齢の低い順に、 $t(15) = 2.87, p = .011, d = 1.35$ ;  $t(29) = 4.77, p < .001, d = 1.69$ ;  $t(41) = 2.50, p = .017, d = 0.75$ ;  $t(21) = 2.56, p = .018, d = 1.05$ ）。以上の結果は、“相手は‘小鳥はうるさい’と思っている”のように、説得相手の心的状態が明示されていれば、子どもは3歳頃から既に他者の態度を生み出している原因の心的状態に着目するスキルを有していることを示唆する。

## 実験2

実験2では、説得相手の心的状態が明示されていない状況を設定し、子どもがいつ頃から他者の心的状態への興味をもち、他者の心的状態を知ろうとするのかを明らかにすることが目的である。この状況を設定するために、説得相手は主人公に反対しているがその理由（i.e., 心的状態）には言及していない場面を用いる。例えば小鳥を飼う場面であれば、説得相手は小鳥を飼うことに反対してはいるが、なぜ飼うことに反対なのかは述べていない状況である。

## 方法

**実験参加者** 5歳児44名（男児22名,  $M = 5;5, range = 5;0 - 5;11$ ）、6歳児28名（男児14名,  $M = 6;4, range = 6;0 - 6;11$ ）、7歳児38名（男児20名,  $M = 7;5, range = 7;0 - 7;11$ ）、8歳児38名（女児20名,  $M = 8;4, range = 8;0 - 8;10$ ）の計148名を対象に、実験を行った。

**材料** 実験1の材料から3つのストーリーを選んで使用した。ストーリーはほぼ同一であったが、実験1とは異なり、説得相手は自分が反対している理由を述べない状況とした。さらに子どもの回答の選択肢として、主人公と説得相手（e.g., 母）と説得対象物（e.g., 小鳥）を描いた同じ絵柄のカード2枚（3つの場面があるため計6枚）を用意した。

**手続き** 実験1と同様であった。

## 結果と考察

一要因分散分析を行ったところ、年齢の主効果が見られた ( $F(3,137) = 3.00, p = .033, \eta^2 = 0.06$ )。多重比較を行った結果、5歳と8歳の間に有意な差が見られた ( $p = .020$ ) が、そのほかの年齢間には差が見られなかった ( $ps > .216$ )。

さらに、各年齢における得点のチャンスレベル検定を行った結果、8歳児のみがチャンスレベル以上の得点であった ( $d(53) = 4.35, p < .001, d = 1.16$ )。しかし、5, 6, 7歳児はチャンスレベルであった (年齢の低い順に  $t(85) = 0.63, p = .531, d = 0.11$ ;  $t(53) = 1.05, p = .029, d = 0.28$ ;  $t(73) = 1.51, p = .136, d = 0.35$ )。

以上の結果は、他者の心的状態が明示されない状況では、8歳頃になって初めて説得相手の反対理由を聞くことができることを意味する。したがって本実験結果は、他者の心的状態が明示されない状況では8歳頃になって他者の心的状態に興味を持ち、それに応じて行動できるようになることを意味する。

## 総合考察

本研究では、他者の心的状態への興味を持ち、他者の心的状態を知ろうとすることによって、他者の心的状態に応じるスキルを適用できるようになるという仮説を検討した。実験1では、他者 (i.e., 説得相手) の心的状態が明示されていれば、それに応じた説得は3歳頃には既に可能であることが示された。実験2では、他者の心的状態が明示されていないならば、8歳頃まではそれを知ろうとはしないことが示された。したがって、本研究では以下のような子どもの説得の発達が明らかにされた。子どもは3歳ですでに他者の心的状態に応じるスキルは持っている。しかし他者の心的状態に興味を持ち、知ろうとするのは8歳ころである。先述したとおり、他者の心的状態に応じるスキルを自発的に適用できるようになるのは8歳ころからであることが示されてきた (Clark & Delia, 1976)。したがって、他者の心的状態に興味を持ち知ろうとする態度が発達することで、他者の心的状態に応じるスキルを適用できるようになる可能性が考えられる。

## 引用文献

- Bartsch, K., & London, K. (2000). Children's use of mental state information in selecting persuasive arguments. *Developmental Psychology, 36*, 352-365. doi:10.1037/0012-1649.36.3.352
- Bartsch, K., London, K., & Campbell, M. D. (2007). Children's attention to beliefs in interactive persuasion tasks. *Developmental Psychology, 43*, 111-120. doi:10.1037/0012-1649.43.1.111
- Bartsch, K., Wright, J. C., & Estes, D. (2010). Young children's persuasion in everyday conversation: Tactics and attunement to others' mental states. *Social Development, 19*, 394-416.

doi:10.1111/j.1467-9507.2009.00537.x

- Chandler, M. (1985). Social structures and social cognitions. In R.A. Hinde, A. Perret-Clermont, & J. S. Hinde (Eds.), *Social relationships and cognitive development*. (pp. 252-266), Oxford, U.K.: Clarendon Press.
- Clark, R. A., & Delia, J. G. (1976). The development of functional persuasive skills in childhood and early adolescence. *Child Development*, 47, 1008-1014. doi:10.2307/1128437
- Erwin, P. (2001). *Attitudes and persuasion*. East Sussex, UK: Psychology Press.
- Perloff, R. M. (1993). *The dynamics of persuasion: Communication textbook series. General communication theory and methodology*. Hillsdale, NJ, England: Lawrence Erlbaum.
- Rubin, K. H., & Rose-Krasnor, L. (1992). Interpersonal problem solving and social competence in children. Van Hasselt, B. Vincent, & H. Michel (Eds.), *Handbook of social development: A lifespan perspective: Perspectives in developmental psychology* (pp. 283-323). New York, US: Plenum Press.

## 謝 辞

本研究の実験にご参加くださった幼児，児童の皆さま，保護者の皆さま，および幼稚園，保育園，児童館の職員の皆さまに心から感謝申し上げます。また，本研究に助成いただきました公益財団法人発達科学研究教育センターに心より御礼申し上げます。